

実践報告：やさしい美術プロジェクト —— 国立療養所大島青松園での取り組み {つながりの家} カフェ・シヨル編 ——

A report on Art for the Hospital project, Yasashii Bijutsu:
Art project [Tsunagari-no-ie] for National Sanatorium Oshimaseishoen
Part “café shiyoru”

高橋 伸行
TAKAHASHI Nobuyuki

Setouchi Triennale held once every three years. The author has been participating in this art festival as an invited artist since the first festival in 2010, and has been developing art projects in 2010, 2013, 2016, 2019 and 2022. Setouchi Triennale takes place on the islands in the Seto Inland Sea and their surrounding areas, and Art for the Hospital Project, Yasashii Bijutsu which I preside over, takes place on Oshima, where almost the entire island is National Sanatorium Oshimaseishoen for leprosy.

This article is a detailed report of Oshima's art project to date for the Art for the Hospital Project, Yasashii Bijutsu. Looking at the project, which spans more than 10 years, overlaps with tracing the reality of the sanatorium for leprosy, which is declining every moment, and I thought that I could express an approach unique to art that is different from medical care and human rights enlightenment. In these days when the word “quarantine” is thrown around daily due to the spread of COVID-19, Oshima, which has been called the “isolation island”, will open up the island by interacting with people who have recovered from Hansen's disease. What can we find? It is hoped that the overall of practice will be presented here and that it will become the next question.

はじめに

瀬戸内国際芸術祭は3年に一度開催されるトリエンナーレ形式の現代美術の祭典である。筆者は初回の2010年から招聘作家（プロジェクト）として当芸術祭に参加し、2010年、2013年、2016年、2019年そして2022年にいたるまでアートプロジェクトを展開してきた。瀬戸内国際芸術祭は瀬戸内海に浮かぶ島々やその周辺地域を会場としており、筆者が主宰する「やさしい美術プロジェクト」は島のほぼ全域がハンセン病の療養所（国立療養所大島青松園）である大島を会場としている。

本稿はこれまでのやさしい美術プロジェクトの大島での取り組みを実践者の視点から詳細に記録

して報告するものである。ここではその皮切りに「カフェ」について詳述する。10年をこえるプロジェクトを具に見ていくことは刻々と衰微していくハンセン病療養所の現実をたどることと重なり、ひいては医療や人権啓発とは異なる芸術ならではのアプローチを表せるのではないかと考えた。新型コロナの感染拡大で「隔離」という言葉が日常的に飛び交う昨今、「隔離の島」と言われた大島でハンセン病の回復者の方々と交流し島を開いていく、葛藤と試行の道のりに何が見出せるのか。ここに実践の全体像を示し、次なる問いとなることを望む。

1. やさしい美術プロジェクトの取り組み

1-1. やさしい美術プロジェクトの始まり

筆者が主宰する「やさしい美術プロジェクト」は2002年に発足、主に総合病院で活動を展開してきた。筆者は発足当時、名古屋造形芸術短期大学の教員を務め、筆者の呼びかけにより学生および卒業生有志15名が集ったことに始まる。先立って筆者は愛知厚生連足助病院の早川富博院長に会い、病院と美術系大学との協働で何かできないか、と相談を持ちかけていた。当時は病院とアート・デザインの連携プロジェクトは例が少なく、作品の寄贈にとどまることが多かった。早川院長によると足助病院は山間の地域医療の中核にある療養型病院であり「足助で最も人が集まる場所」とのことで、地域に開かれた病院を模索しているところであった。(足助病院理念：1. 終の住処を継続するための医療 2. 自助・共助・公助し想い寄り添う医療 3. 共に集い近助する福祉・介護) 医療と美術が交流し、刺激し合い、議論を重ね、共に取り組む、といったより踏み込んだ関わりで発展する好機であった。以降、小牧市民病院、新潟県立十日町病院、発達センターちよだ、老人福祉センターぬくもりの里など、医療福祉との協働による取り組みは2020年の新型コロナ感染拡大に至るまで続けられた。

1-2. 病院で始めたこと 利用者さんへのインタビュー

ここで足助病院での活動で手始めに行った、入院している利用者へのインタビューのことを記しておきたい。というのも、本稿の大島での取り組みにつながる重要な視点を含んでいるからである。院長の発言からヒントを得て、やさしい美術プロジェクトのメンバー全員で足助病院が立地する周辺地域を歩き、街の成り立ちや風土を体感した。その後病院サイドの後押しもあって、院内施設を見学し、各病室を訪れて利用者インタビューを行う「病院訪問会」を実施した。異例ともいえるインタビューが実現したのは背景がある。当病院の1階の一部の廊下が高校生のバス停に向かう通り道になっており、日常的に制服姿を見かける。マナーに問題があれば、その都度注意を促して問題が小さいうちに解決し、これまでに通行禁止にしたことはないという。お互いの目が届き、何かあれば声を掛け合う。「信頼」は一瞬揺らぐことがあってもそれを回復するしなやかさがあり、それは病院が根付く「地域」のなす業であろう。本来病棟はプライベートな空間であり、見知らぬ者が訪ね歩くような場所ではないが、こうした風通しの良さに救われて実施することができた。

この日を迎えるにあたって学生メンバー同士で、院内で留意すべきマナーを出し合い、病院サイ

ドの意見や指摘を参考にし、より精度の高いマナーペーパーを作成した。また事前に利用者に聞きたい項目を列挙してメンバー間で共有し、並べてする質問と個人的な質問を整理した。定量化まで行かなくとも、院内にいる人の美術への関心度を見極め、病院にふさわしい作品の傾向を捉え、院内のどのようなところに必要とされるか、といった要望を明確にしたいねらいがあった。先に利用者さんに話を聞くことになったが、メンバー間のミーティングを重ねるうちに病院全体のことに意識がおよぶと病院で働く職員にもアンケートを取ろう、と対象を広げることになった。この病院に居る人全体で捉える考え方は後のプロジェクトの方向性に大きく影響を与えた。

最初の病院訪問および利用者インタビューは2002年6月19日に行った。メンバーはマナーペーパーを読み合わせた後それぞれの担当フロアに向かう。学生2名から3名で5つのチームを組み、1階から3階の各フロアに分散し、看護師さんの指示にしたがって順次病室を回らせていただく。1階は内科、外科、整形外科、患者食堂、売店、デイケアルーム、脳外科、在宅介護支援など主に外来診察室と検査室がある。2階は産婦人科、泌尿器科、眼科、耳鼻科等、病室は2、3階にあり（一般病床153／療養病床50）手術室は3階にあった。職員の立ち合いのもと、面会謝絶の部屋以外はすべての場所に行くことができた。（図1）

その帰り道、メンバーの口はいつになく重かった。個々で感じたことを噛み締めるのがやっつとで言葉にならないといった感じである。インタビューで話題を広げることができた利用者さんがいる一方で話すことさえ困難な方がいたことも事実である。時間をかけて準備した質問項目は話すきっかけになったものの、ほとんど用をなさなかった。こちらが聞きたいことを聞き出そうというのがそもそもの間違いだったのかもしれない。病室を回ったメンバーの多くはとにかくそこにいる方が何を語るのかに集中することになった。ある寝たきりになった方は話しかけても目の焦点が合わず、何かを語っているのだが聞き取ることができない。ある方は長い時間点滴を受けていて自力でトイレに行きたい、と語った。またある方は戦時中のご自身の体験を語った。ご家族にも話したことがないそうである。当病院が立地する足助地域に生まれ育った方は、幼少の頃の野に遊ぶ日々を回想した。

1-3. ひたすらその人の傍に立つ

その後は毎日のようにミーティングを行った。メンバー一人ひとりがまとまらない言葉を引っ張り出してはテーブルに乗せて結論の出ない議論を続けた。そこで見えてきたことがいくつもある。筆者を含めたメンバーは「病院」を固まった概念で見ていた節があった。病院とはこんな場所と決めてかかっているので「病院にふさわしい美術やデザイン」という考えに行き着いてしまう。否その「ふさわしい」という質感に決まった色や形があると思いついていたと言い換えようか。利用者の方々と話してみても、その人にはその人の痛みがある、という当たり前のことが見えてきた。心底理解はできない。でもその痛みは確かに他者である私たちを揺さぶるのである。病院へ行くのを口実に、何かを「してあげる」とか「施す」という傲った目線があったのかもしれない。何かを成すというのではなく、そこにいる人の身になった時に目の前に広がる世界はどう感じられるのか、関わる

者一人ひとりの想像力が試されている。

足助病院との協働はこのように始まった。振り返ると、病院内を展示会場にするとか、展覧会の会期を定める、といった目標をまったく設定していなかった。「病院を知るには隅々まで院内を歩くと良い」と病院サイドが勧めたのはプロジェクトサイドの意識を変える意図があったのか今は知る由もない。しかし病院を訪れ、利用者の声にひたすら耳を傾けるという経験によって私たちの固定観念は打ち砕かれ、根本からじっくりと紡ぎ直すということが起きたのである。

先日会った病室のベッドで横になるあの人のことを慮る。その人は自身の回復を願いながら扉越しに廊下を眼差している。あるメンバーはその眼差しが届くところの作品を考え続けていた。病状が回復に向かいやっとの思いで自身の足で立ち、踏み出す一歩、その先にあの廊下がある。何メートル、何センチといった計測値にとどまらない、そこにいる人の身体を伴った空間を想像し、ひたすらそこに寄り添うのである。

病院にいる人—それは通院入院している利用者のみでなく、見舞い者や病院職員が含まれる—と一緒に感じ、考え、そこにいる人の傍に立つ。何もできないかもしれない。それでもなお、ここで何かをしたいと動き、実現していく。「やさしい美術プロジェクト」がゆくりと始動した瞬間であった。



図1) 足助病院での利用者インタビューの様子

2. 大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ

2-1. やさしい美術プロジェクト 国際芸術祭に参加

筆者は2000年の初回から当地に足を運び大地の芸術祭を体験してきた。芸術祭が舞台としている妻有地域は新潟県の山間部にあり、屈指の豪雪地帯として知られる。その濃密で生命力溢れる風土を肌で感じながら広大な山村地域に点在する作品をめぐる旅はこの上ないものだった。場所との深い結びつきを感じさせる作品群はアーティストの営為の凄みを感じさせ、同時に雄大な自然に抱かれ、ちっぽけではかない様相が「美しい」と筆者には感じられた。美術評論家の中原祐介氏は「大地の芸術祭の作品に感じられるのは、ある開放感です。美術作品は展示空間+作品という通念をくつがえし、大地の芸術祭は「脱芸術」の方向に向かっている。」との言葉を寄せており、「やさしい美術プロジェクト」の実践と共鳴するところがある。プロジェクト活動として新しいフェーズに入るべく、大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2006のプロポーザルコンペティションに応募した。企画書には当地域にあるいくつかの病院を協働施設に挙げたが、病院サイドの受け入れ態勢なくして成り立たず、現地をよく知る芸術祭サイドのコーディネーションを求めた。後日当芸術祭

総合ディレクターの北川フラム氏から審査結果の連絡があり、実現に向けて進めることが決定した。

2-2. 非公開プロジェクト

アートフロントギャラリーのコーディネートにより、新潟県立十日町病院との顔合わせが実現し相談が始まったのは2005年11月。その時点では具体的な進め方や実施内容の検討に入る段階ではなかった。2005年4月に折しも個人情報保護法が施行され、利用者のプライバシーに関するコンプライアンスの意識が高まっていた時期である。病院サイドからは「不特定の観客を招き入れることは絶対しない」と厳しく言い渡された。病院関係者からすれば、閉塞感や緊張感あるイメージを拭えるようなアイデアは欲しいものの、観客を招くとなれば病院の使命が揺らぎかねない。幾度かの議論の末に、十日町病院で実施するプロジェクトは芸術祭の作品であっても基本的に「非公開」で行うことで合意した。もともと病院に利用者としてあるいは見舞い者として訪れた方が作品と出会うのは、プロジェクトの目指すところであり齟齬はない。かくしてやさしい美術プロジェクトと新潟県立十日町病院の協働プロジェクトは大地の芸術祭で初の「非公開プロジェクト」となった。手始めに医師や看護師、事務局ら各部署の代表者で編成した「病院内検討委員会」（後に院内の任意団体「みなーれ」（観なされの意）に改称）を立ち上げていただいた。続いてプロジェクトと院内検討委員会との相談の場「研究会」を開催。第一回研究会は2006年2月16日に行い、作品プランを発表した後、それら作品を院内環境に据えた場合の利用者への影響をあらゆる角度から検討し、実現への道筋をつけた。総勢7名のメンバーで手術室前や病棟の廊下、待合、検査室前、霊安室廊下などに作品を設置したほか、小児科外来では、ワークショップやパフォーマンスを実施するなど、活動は院内全域にわたった。

2-3. 病院と周辺地域のあいだ「やさしい家」

その後やさしい美術プロジェクトは名古屋造形大学において産官学連携や地域貢献の窓口となる「社会交流センター」の1プロジェクトとなった。さらに競争的資金の獲得にも積極的に乗り出し、平成21年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（通称＝現代GP）に採択された。全学で組織的に取り組むことになった、教育プログラムと社会実践の融合＝やさしい美術プロジェクトは現代GP選定期間（2007年10月～2010年3月）の間、名実ともに大学のオフィシャルな地域貢献プロジェクトとなった。当時は愛知厚生連足助病院、小牧市民病院、発達センターちよだが協働施設となっており、メンバーは学内外合わせて30名を越え、アルバイトスタッフの4名で編成し、医療福祉との連携プロジェクトとしての最盛期に入る。大地の芸術祭2006の閉幕後も「雪掘り」や「田植え」、「稲刈り」にと当地を継続的に訪れ、病院職員との交流を通して互いの信頼感は深まっていった。まさに機は熟した感があり、病院と芸術祭実行委員会の了承を得て大地の芸術祭2009の参加が決定。2006年の非公開プロジェクトを踏まえて、2009年は新しい試みとして病院に隣接する空き家を活用し、病院と周辺地域の間をつなぐ拠点を置いた。空き家は「やさしい家」と名付け、芸術祭で一般公開された。変わらず院内は非公開だが、「やさしい家」があることで取り組みのあり方

は大きく変わった。「やさしい家」では日ごとに病院内で展示する作品を制作するワークショップが開かれ、近所の子どもたちが遊びに来る。病院内で展示された作品が少し間を置いて「やさしい家」でも展示される。「やさしい家」の八畳間2間と縁側廊下では院内の展示状況を映像や写真で表現し、プロジェクトメンバーがその内容を解説する。常時プロジェクトメンバーが滞在し、そこへ病院職員が立ち寄って膝を突き合わせて議論することもあった。(図2)

ある日「やさしい家」におらずおずと入ってこられた方に話しかけると、つい先日まで十日町病院に入院していたとのこと。院内でふと出会った作品が目にとまり、それから毎日眺めていたようだ。奥の八畳間にご案内すると、その方は導かれるようにある作品の前に進み膝をついた。「この作品です」。「やさしい家」でかの作品と再会を果たしたのである。

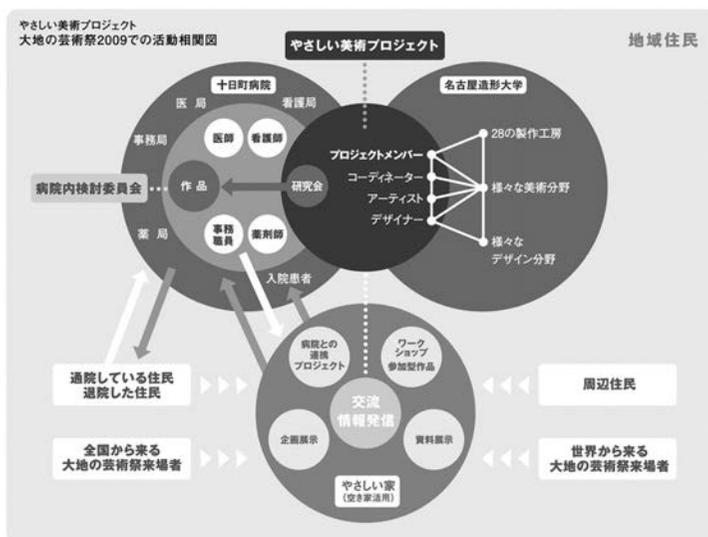


図2) やさしい美術プロジェクト 大地の芸術祭 2009 での活動相関図

3. 国立療養所大島青松園へ

3-1. 大島との出会い

大地の芸術祭 2006 が閉幕してまもなく総合ディレクター北川フラム氏から相談があった。それは公式に開催が決まっていない瀬戸内海の島々を舞台にした国際芸術祭のことだった。北川氏いわく、もし瀬戸内で芸術祭を行うならば、欠かすことのできない場所、そこがほぼ島全体がハンセン病療養所となっている大島であった。北川氏は筆者にプロジェクトや作品制作の依頼をしたわけではない。まず「行ってみたい」とのこと。筆者は現地に赴くことから始めることにした。

ハンセン病について概略を記しておく。病名は1873年にらい菌を発見したノルウェーの医師アルマウェル・ハンセン氏にちなむ。らい菌に感染すると3年から数十年と比較的長い共生状態から菌が増殖して発症する慢性抗酸菌感染症である。病原性は弱く、正常の免疫応答能の人であれば感染しても発症することはほぼない。主に末梢神経と皮膚が侵され、放置すると末梢神経の麻痺や運動障害などの後遺症をのこすことがある。特に目につきやすい手足や顔に変形を生じることから、有史以来「業病」や「天刑病」などと忌み嫌われてきた。不治の病（自然治癒した人もいる）とされてきたハンセン病だが、日本では1949年から治療薬「プロミン」が広く使用されるようになり、現在はダブソン（DDS）ヤリファンピシン（RFP）などを服用する多剤併用療法（MDT）が確立し、たとえ感染し発症したとしても完治する。

瀬戸内海に浮かぶ大島は、香川県の高松港から北東へ8kmのところにあるひょうたん型をした小さな島。東に「二十四の瞳」の舞台となった小豆島、西に「鬼ヶ島」のモデルとなった女木島をのぞむ。浜にはおよそ800年前に屋島の戦いからおちのびた平氏の亡骸を埋めたとされる「墓標の松」が茂る。61haのほぼ全域がハンセン病の療養施設「国立療養所大島青松園」となっており、1909年に第四区療養所として開所、全国にある13箇所の国立療養所のうち唯一の離島である。現在、入所者（2022年10月現在：38名／平均年齢86歳）は全員がハンセン病を完治しており、高齢と後遺症のケアを受けながら穏やかに暮している。

3-2. 初めての島訪問

筆者は事前に国立療養所大島青松園の事務所に電話とファックスで訪問したい旨を伝え、青松園の事務長が直接の窓口を担当していただけることになった。筆者が初めて大島を訪れたのは2007年10月のこと。高松港から官用船に乗り、20分ほどで大島港着。棧橋から老松の間を抜け国立療養所大島青松園の正門をくぐるとすぐに事務所が見えてきた。森英世事務長とそこでお会いし、園内の主だった諸施設をご案内いただいた。その後1、2時間ほど島内を歩いたが、ハンセン病の回復者である入所者の方にお会いすることはなかった。宗教施設、火葬場、納骨堂、趣味耕地をまわり、「北海道」地区と呼ばれる北部の一般寮を訪ねた。現在立ち並ぶ長屋は5つの個室に分かれているが、それ以前は二十四畳が2間で、そこに多い時は12人の入所者が肩を寄せ合って生活していたそうだ。1929年ごろから始まったとされる、各県が競ってハンセン病患者を見つけ出し、療養所へ隔離・強制収容する「無らい県運動」が1958年前後に再び盛んになり、在園者数が700名を越えたという。ひょうたん型をした大島の脇腹にかかる固定棧橋あたりを境に北部は患者が暮らし、南部は職員が暮らすとされていた。その境界線はかつて「有毒線」と呼ばれ、杭が立ち並び有刺鉄線が張りめぐらされていたという。現在はその痕跡をどこにも認めることができない。いたるところに白線が敷かれ、ガードレール状の柵が整備されており、これらは車線ではなくハンセン病の後遺症で視力を失った方々のための盲導線や盲導柵である。一定間隔で設置された小型スピーカーからは「乙女の祈り」「ラインの流れ」のオルゴール音が流れる。これらは盲人の方が位置を知るための盲導鈴である。島の中央の小高い丘には納骨堂が立つ。「療養所」とは名ばかりで、終生ここに暮らし、死して骨となっても故郷に帰ることができないという現実をまざまざと物語る。（近年は故郷と療養所に分骨する方が半数ほど）納骨堂の前には療養所で生まれ育つことのできなかった胎児の慰霊碑が立つ。療養所内で結婚は認められるものの子どもを産むことが許されず、墮胎や断種手術が行われてきたという現実。こうした療養所の歩みを土台にした標をめぐることができるが、今の姿から開所当時の大島青松園を想像することは難しい。むしろ青松白砂の趣と鳥々の眺めが相まって「静かで整備が行き届いている」というのが第一印象であった。1996年に強制隔離を掲げた「らい予防法」が廃止された後、多くの見学者が島を訪れるようになったが、たった1日施設をめぐるとは実感はわかないだろう。筆者は島内を歩くとほのかに感じる違和感や霧が晴れない感情を抱えたまま大島を後にした。

3-3. 大島の日常が入ってきた

利用者と語らう機会を持つことで「病院」という固まった観念が解かれ、そこで一人ひとりが息づいていることが実感されていく。それが取り組む者の創造性を動かしていくという経験は、ハンセン病の療養所である大島の場合でも活かされるかもしれない。しかし療養所とは一体何なのか、そしてそこで生き抜いてきたということがどういうことなのか、それは遥か遠くにあつて自身の立っているところとうまく結びつけられない。この霧のかかった問いは筆者の中で日に日に膨らんでいった。そこにある痛みはどこまでいってもその人のものである。が「それでも、」という考えが頭を過ぎる。筆者はもう一度大島に行くことにした。

自ずと大島に足がむき、気がつけば月に1回程度大島に通うようになっていた。カメラを携えて気になったものを撮りながら、ぶらぶらと島内を歩く。またある時は事務長に入所者の方を紹介いただき、事務所内でお話を聞く機会を得た。事務長の計らひだろうか、聞き取りさせていただいた方は陶芸や写真、短歌などの趣味を持っていて、物づくりの楽しみについて話が及ぶと自然と話はずみ緊張が和らいだ。訪問を重ねるうちに、入所者の方や介護職員さん（入所者の後遺症や高齢によるケアを担う）、作業部職員さん（島内の雑務を担う）と道端で出会う機会が増えてきた。「あんた、最近よく見るね」と声をかけられ、少しずつ馴染んできたようである。道端で挨拶し、世間話をする。このごく当たり前の日常が「ぶらりとやってくる」人のいない大島では実は当たり前ではない。整備の行き届いた大島の風景に手を伸ばし触れていくと、そこに伝え聞いたエピソードが重なって感じられるようになってきた。いつの間にかそこで出会う人、語り、風景は筆者にとってかけがえのないものになっていった。この間会ったAさんは元気だろうか。Bさんには陶芸のことをもっと聞きたいな、Cさんはいつもカメラを持って島の生き物や風景を撮影しているから、話が合いそうだな、などと大島を訪れる度に会いにいける縁ができる。筆者の日常に大島が入ってきた。

大島に通うようになって半年が過ぎた頃、盆栽に水を遣るDさんから「今度一杯やるか」とお誘いを受けた。筆者は翌月に愛知の地酒を持参し、Dさんのお宅でご馳走になった。Dさんのお宅は大島北部の一般寮の一室である。後遺症で感覚を失った手で湯呑みを抱え、Dさんは語りはじめた。食卓にあがった野菜はDさんが育てたもので、昔は（ハンセン病患者の手で育てられたために）誰も手を付けなかったこと、Dさんと奥様のEさんの間に産み育てることができなかったお子さんがいること。聞き取るだけでなく、取材でもない、一献傾けて聞き入る語りはえも言われぬ肌理を伴って筆者に染み込んできた。

3-4. 大島の決断

2008年に入り実行委員会の設立と瀬戸内国際芸術祭の開催が決定した前後に、筆者の大島で取り組むプロジェクトの構想が固まりつつあった。総合ディレクターに就いた北川フラム氏に構想の概略を相談したところ意見が一致し、実施に向けて動いていくことになった。通常、作品を制作するアーティストとコミュニティとの間をメディアーターが引き合わせるが多いが、大島の場合は先立って筆者が交流を深めてきた経緯から、プロジェクトを実現していくための関係性の構築やプロ

プロジェクトの内容の検討、実現に向けての手続きなどを筆者が一手に引き受けることになった。ハンセン病療養所が芸術祭の会場の一つに名乗りをあげ、一般公開に踏み切るのは本邦初である。筆者はいつも芸術祭のことが頭の片隅にあったが、大島を訪れるとそれはどこかに吹き飛んでしまった。入所者の方々と語り合ううちに（筆者自身がそうだったように）大島が何度も訪れたい場所になってほしいと願うようになった。アーティストが自分の作品を多くの人に体験してもらいたい、と望むのとは少し違って、大島を体感し大島で生き抜いてきた人と出会う場面を作りたい、と言ったら良いだろうか。その「体験の質」に注力すること。それが筆者のできることなのではないか。大島は入所者自治会協和会（以降、入所者自治会と表記）が先頭に立ち、芸術祭の参加意志を固めた。ちょうどその頃は「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が国会で審議されている時期で、各療養所が地域社会と共に歩む道を模索していたが、大島は離島であることがネックとなり構想を断念せざるを得ない状況にあった。その最中芸術祭に参加することにしたのは、将来を考える上で何かヒントになるかもしれない、とにかく一歩踏み出そう、という思い切った決断であった。

3-5. 定例検討会の発足

筆者はまず、芸術祭の実行委員会の両翼を担う行政サイドの香川県と高松市、それに対して療養所の事務、福祉室、医局、船舶（官用船）、そしてそこにハンセン病回復者の方々を代表して入所者自治会とやさしい美術プロジェクトが加わり、一堂に会して「大島を開く」方策を話し合う場を提案した。後にこの協議会は「定例検討会」と名付けられた。大島の入所者の方々は、元々ここで暮らすことを望んだわけではない。半ば無理矢理連れてこられた方がほとんどである。入所者の多くは家族や故郷に偏見と差別が及ばないように出自を断ちあるいは隠してここに暮らしてきた。先述の通り大島ほぼ全域が国直轄の療養所であり、施設のほとんどが国有財産にあたり、大島港と高松港を国営の官用船がつないでいることから、地域に由縁のある人々が代々暮らすコミュニティとは根本的に異なる。今はその痕跡を見つけることは難しいが、「職員」と「患者」が分けられ、厳格に管理されてきた歴史がある。こうした複雑な経緯の末の現在の療養所で、入所者一人ひとりの尊厳を守るためにこの大島を構成している組織の代表者が集い、総力をあげて一般公開への道を切り拓かなければならない。



図3) 国立療養所大島青松園 一般公開に向けた「定例検討会」の位置づけ

初回の「定例検討会」は2008年10月31日に行った。筆者が司会進行を務め、はじめにやさしい美術プロジェクトの病院での取り組みを紹介した。地域に開かれた病院を創出していくアートプロジェクトの実例を解説し、瀬戸内国際芸術祭では「大島が表現している、それを島の外へつなぐ役を担いたい」との基本姿勢を伝えた。以降、毎月1回「定例検討会」を行い、芸術祭での一般公開に向けて、プロジェクトの内容を一つ一つ検討し、その実施方法を詳細にわたって具体化し、それに伴う連携を構築していくことで合意した。(図3)

3-6. やさしい美術プロジェクト 大島での取り組み {つながりの家}

定期的は大島を訪れて入所者の方々と交流を深めるなかで、語られたことを重ね合わせていくと下記のキーワードが浮かんできた。これらをあえて大島の方々が声をあげているかのように表した。その言葉の真意や沈潜する感情は何なのか、容易につかめるものではなく、受け止めた声を胸に問い続ける筆者の、そしてやさしい美術プロジェクトの決意表明でもある。

- ・ずっと大島で暮らしたい
- ・大島のイメージを変えたい
- ・大島を人が集う島にしたい
- ・大島で生きてきた、という証を残したい

このやさしい美術プロジェクトが大島で取り組む、大島とその外とをつなぐアートプロジェクト総体を {つながりの家} と名付けた。

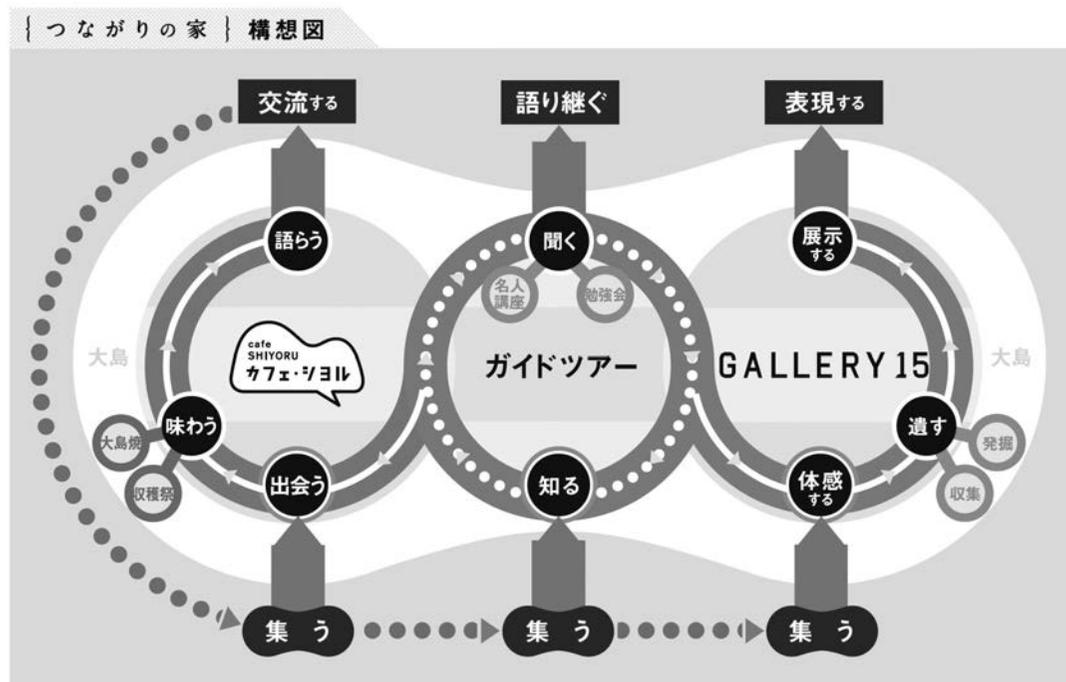


図4) 国立療養所大島青松園での取り組み {つながりの家} 構想図 (GOOD DESIGN EXHIBITION 2013 受賞発表展パネルより)

大島を知るために主要な施設をめぐる「ガイドツアー」、大島で生き抜いてきた方々の証を表現する「ギャラリー」、誰もが集うことができ、大島の今を味わうことのできる「カフェ」の三つが連動して大島を訪れる多様な契機を創り出す。大島での個々の体験は島を離れた後も誰かに語り継がれていく。大島で展開されるツーリズムの循環は島の外にまで拡げて意図しており、大島が誰かにとっての「また訪れたい場所」となる緩やかな動線を敷いている。つまり筆者の原体験がプロジェクトの根幹に据えられている。大島の生に触れることは自分自身の生に触れることである。そのきっかけはカフェでお茶を楽しむで良いし、浜からの眺めであっても良い。(図4)

4. カフェ・シヨル

4-1. ただ一緒に過ごす場所

誰が居てもいい場所。入所者も青松園の職員も、来島者らも分け隔てなく居られる場所。語らうのもいいけれど、ただそこに佇んでいてもいい。そのような場所があればと筆者は思いを巡らせていた。目に見える有刺鉄線や壁は時代とともに朽ちていったが、代わりに心の中に仕舞われたのだろうか、なくなっただけではないのである。コロナ禍で顕れた様々な衝突や分断はそれを示しているとは言えないだろうか。筆者が「ただ一緒に居て過ごす場所」のことを考えていたところ、やさしい美術プロジェクトのメンバーである、井木宏美と泉麻衣子の二人から「カフェ」のアイデアがあがった。二人で運営したいとの申し出である。井木と泉は足助病院の訪問で病室をまわり利用者にインタビューをした仲である。二人は卒業後もスタッフとしてやさしい美術プロジェクトの活動を支えてきた。筆者のリサーチに同行し大島と出会った二人。ひそかに培っていた創造性は芽吹きつつあった。カフェのプランはさっそく「つながりの家」に組み込むことにした。

4-2. カフェ・シヨルのコンセプト

「シヨル」は讃岐弁で「～している」の意である。どこかフランス語のような響きがあり親しみやすさと小粋さが同居するところから採用した。大島には食堂（食堂セイブ／2012年閉店）があったが、「カフェ」はなかった。青松園職員の企画で、毎週金曜日の午後到大島会館（島内の集会所施設）の会議室を一時的に喫茶室にして語らう場が設けられており、入所者に好評とのことも構想する上での後押しになった。

カフェのメインコンセプトは「大島の今を味わう」である。大島の歴史や入所者の記憶を掘り下げていく「ギャラリー」とのコントラストも意識している。食材は入所者の「畑名人」が手塩にかけた野菜や果物をメインに、季節の食材でランチメニューとお菓子を提供する。「食べる」とは「受容」することに他ならない。器は大島の土で作る。大島を味わいつくす仕掛けである。カフェを運営するスタッフの井木と泉は入所者の方々と畑に入りお手伝いをして、食材をいただいている。この時、大島の土に触れる機会が喜びに満ちていることに気がついた二人はカフェの運営に加えて、季節の果物や野菜を収穫し食材に加工するワークショップを「～祭」と銘打って参加を呼びかけることにした。カフェの場所は第二面会人宿泊所1棟を活用することになった。入所者との面会に訪れた人

が泊まる平屋の簡素な宿舎で現在はほとんど使われておらず、老朽化のため取り壊す既の所で白羽の矢が立った。大島で暮らす人がちょっとおしゃれをして「お出かけ」するカフェにしたい。そこに島の外からも人がやってくる。療養所の日常からの飛躍がそこにある。

4-3. 大島焼

療養所内では、陶芸や七宝の他、刺繍、書道、短歌、絵画、写真などの趣味を持つ人が多く、集ってクラブを設立している場合もある。療養所の職員の配置が十分でなかった頃は症状の重い人を軽症の人が世話をするなど、療養所の作業のほとんどを入所者が担う「患者作業」があったが、1960年代から1970年代後半にかけて段階的に職員に返還された。それに伴って入所者に時間の余裕が生まれたが、それは否応なく己の境遇に向き合うことでもあった。それを晴らすべく創作や信仰に身を投じる人が少なくなかった。管理する療養所からすれば、趣味や宗教は入所者の様々な感情を抑えるのに都合良かったが、きっかけはどうか、入所者にとっての趣味＝創作の楽しみは、命をかけて「生」を確かめ「生」を表し、時に入所者同士が高め合う活力となった。カフェ・シヨルで使用する食器は大島の土で作ることに決めていた筆者は、入所者陶芸クラブの一員である「陶芸名人」の山本隆久さんにアドバイスをお願いした。というのも山本さんは、あるメディアの取材で大島の土で陶器を制作し、見事に成功していたからである。島内で土器が出土しており、先史時代に焼き物が作られていた可能性もある。土は療養所ができるずっと前からそこにある、そんなロマンが「大島焼」の制作へと駆り立てた。大島南部にある貯水池の集水路が巡らされた山の麓で土を採取した。表土の硬い礫の層を鶴嘴で掘っていくと、その下から濃褐色の粘土が塊状に出土する。それらをそのまま軽トラックに乗せて運び出し、砕いて余分な石や木の根などを取り除く。次に小型のコンクリートミキサーにかけて溶かし、泥漿を篩にかけていく。さらに水簸して精製した土を素焼きの鉢に移して水分を濾していく。土の採取から精製は2009年の8月から10月にかけて行い、その後はポリバケツに入れて半年ほど寝かせた。2010年の3月から4月にかけて名古屋造形大学の陶芸部の部員3名が筆者とともに大島に滞在し、こえび隊（瀬戸内国際芸術祭ボランティアサポーター）とともにカップやソーサーを制作した。陶芸の創作は後遺症のケアに位置付けられており、青松園の治療棟作業療法室の一角に電気窯が設置されている。大島の土で作った器「大島焼」の焼成は入所者の方々が利用するこの電気窯を活用させていただいた。

4-4. カフェ・シヨルの位置付け

定例検討会でカフェの提案をしたところ、アイデアとしては歓迎されたものの、国立療養所内でどのように位置付けるかが争点となった。営利目的の店舗であれば、国営の施設上の必要性が問われ、正規の手続きに従えば入札制により店舗を決定しなければならない。街中にカフェをオープンするのは異なり思いのほかハードルは高い。その打開策として、非営利のカフェにする案があがった。一切お金を取らないカフェである。お店という概念を取り払い、島外の人と大島の入所者の交流を目的とし、地域社会に包摂された療養所の将来像につなげるイメージである。これに入所者自治会

の方々がすかさず口をはさんだ。なんと「お金を使いたい」とおっしゃったのである。よくよく聞けば、仲のいいお友達や介護員さんにたまにはご馳走してあげたい、せっかく自分の部屋から出かけたのだからお店でお金を使いたい、とのことだった。筆者はこの意見に思わず震えた。なぜなら入所者の方々は大島の外からの風を呼び込むだけでなく、実のある交流を求めたからである。入所者の方々の期待感が表れたこの発言はカフェが実現に向かう突破口になった。関係者の誰もが入所者の方々の本気度を感じ取ったのである。議論の末様々な調整を進め、やさしい美術プロジェクトが目指すカフェのあり方と入所者の方々の希望が融合したカフェ・シヨルが誕生した。大島のカフェの基本は非営利である。第一に入所者の方々の希望を尊重し、島外にある街のカフェと何ら変わらず代金を支払ってカフェを楽しむ。食材のほとんどを大島の入所者が育てた作物でまかない、店頭で多少の売り上げがあったとしてもコーヒーや小麦粉などの大島で入手できない食材の費用で相殺され利益はほとんど出ないことが判った。

カフェが「作品」であることも重要である。詳しくは後述するが、提供するマーマレードは退所して社会復帰を果たした方から島に残る方に託された甘夏の木から採ったものである。定番メニューとなった「ろっぽうやき」は以前和菓子職人だった方が大島青松園に入所して作り続けた素朴な焼き菓子である。食べられなくなった今も入所者の誰もが語り継ぐ大島の味覚である。このようにカフェ・シヨルは大島で生き抜いてきた方々の記憶を、食を通して体感する「作品」なのである。こうしてカフェ・シヨルは大島にオープンした本物のカフェであると同時に体験型の作品として歩み出した。

4-5. カフェ・シヨルの内装

これまで述べたようにカフェ・シヨルは島の内と外が混ざり合う、日常でありながら非日常でもあるいわば汽水域である。面会人宿泊所の役を全うした建物への敬意を払いつつ、今までの大島にはない明るく温かな空間とするために内装に手を入れることにした。

第二面会人宿泊所は平屋建てで、六畳2間四畳半1間の和室を廊下でつなぎ、突き当たりに共用のトイレがある。加えて四畳半の管理人室に簡素な台所が付属。まず、宿泊所の部屋割りとなった壁を取り外し、一つの大部屋とした。木造の軸組をそのまま生かしつつ和装の塗り壁の上に左官ゴテで漆喰を塗りつけていく。これで部屋全体の明るいペーストーンができた。盛り付けた漆喰にビーチコーミングで収集した貝殻やシーグラスで装飾していく。什器は高松の街で閉店した喫茶店から譲ってもらうことになった。昭和時代を色濃く映すベンチ椅子とローテーブルを配置、床は畳のままだが和洋折衷の雰囲気程よく親しみがわく。カーペットを敷く案もあったが、入所者の方々が感覚を失った足で歩くとつまずく危険性があり取りやめた。オーガニック Cotton の生成りのカーテンが海風を受けてふわりとなびく。島内で拾った年季の入った杉板はカウンターテーブルにし、一時休校となっている庵治第二小学校から借りた木製椅子と組み合わせた。新たに購入したのと言えば大型の冷蔵庫と調理器具、アンティークのガラスケース、メニューを書き記す黒板ぐらいのものである。ここに「大島焼」の食器が加わり季節の食材を生かした料理が彩りを添える。

4-6. 関わりの緒 かんきつ祭とよもぎ祭

カフェ・シヨルは大島で暮らす入所者の方々の協力がなければ成り立たない。なぜなら食材の多くは大島で育てられたものだからである。入所者の方々に付き添う職員の方々の応援も欠かせない。2010年4月25日にやさしい美術プロジェクトカフェ・シヨル主催で「よもぎ祭」を行った。ボランティアサポーターこえび隊から参加者を募り、総勢10名程で島内を歩き、春先の柔らかいよもぎを摘んだ。カフェ・シヨル＝第二面会人宿泊所にもどり摘んできたよもぎを茹でて長期保存に耐えるよう加工する。冷凍保存したよもぎはカフェで提供するメニュー（パンやソースなど）に加えるほか、よもぎ餅（2010年12月17日に餅つき会を開催）にも使う。こうした野草を使うアイデアは入所者の方々の思い出話をもとになっている。

よもぎ加工が一区切りついた午後、カフェができるのを楽しみにしている入所者の方々に呼びかけて茶話会を開いた。この時まだ大島焼の器はなく、木製のカトラリーを用意し、藍染のテーブルクロスにお菓子とドリンクを並べた。カフェのスタッフ井木と泉はこれに先立って2月7日に、入所者の方と一緒に甘夏蜜柑を収穫し、それらを調理してピールとマーマレードを作った。（後に「かんきつ祭」と銘打ち2011年2月11日にワークショップを開催。以降恒例となる。）（図5）ピールを混ぜ込んでクッキーを焼き、マーマレードとともにテーブルに並べる。コーヒーは高松市内の自家焙煎のお店で入手した豆で淹れた。淹れ方も手ほどきを受けている。茶話会は試食会も兼ねており、入所者の方々の感想をうかがうことができた。どのように店内へご案内しておもてなしするか、実際に入所者の方々に足を運んでもらって分かったことがたくさんあった。入店の際に玄関で靴の脱ぎ履きがあり、後遺症によっては補装具を着けていらっしゃる方もいて部屋にあがる際に手伝う場面も想定できた。できる限り「カフェに行きたい」と思った方をお招きするには、スロープを設置し車椅子でも入ってもらう必要があり、今後の課題も見えてきた。（スロープは2013年に設置）

2010年6月25日にカフェの看板を外壁に設置。（ロゴデザイン：溝田尚子）什器を揃え、内装を完成させ、大島焼の器類のほかすべて準備が整ったところで、7月12日にカフェ・シヨルプレオープン。瀬戸内国際芸術祭2010開幕を目前にひかえていた。



図5) 2010年2月7日の茶話会の様子

4-7. 「ろっぽうやき」と「だいだいマーマレード」

カフェ・シヨルの定番お菓子「ろっぽうやき」はカフェスタッフの泉がかつて大島で親しまれたお菓子を復刻したものである。大島には「加工部」という入所者が立ち上げた、うどんのほか六方焼や栗饅頭などのお菓子を作る部署があった。ハンセン病になり大島に入所した元菓子職人が作る

六方焼は今も語り草である。六方焼は餡をうどん粉でくるみ火床の上で転がして狐色に焼いた素朴なお菓子である。立方体の形状から六方焼と呼ばれている。ルーツは北陸や近畿のようだが、大阪という説もあり定かでない。六方焼は大島が誇る味覚であった。入所者の方々に話をうかがうと必ずと言ってよいほど六方焼が登場する。焼きたてよりも茶筒に入れて何日かおいた方が美味しいとか、島の外からきた方にお土産に持たせたとか、療養所の暮らしに煌



図6) 大島焼の皿にのせられた「ろっぽうやき」

く1ページにはきまって六方焼があった。「加工部」はすでにない。菓子職人だった入所者の方も亡くなり、六方焼は幻と化してしまった。カフェスタッフの泉はこの記憶を再生したいと考えた。それが叶えば入所者の方々の内にある記憶を共に味わうことができる。泉はいくつかの資料を元に六方焼を作ってみては入所者の方々に味見をしていただいた。ところが何度チャレンジしても入所者の味覚に合うものがない。もっちり感や餡の口どけ、鼻に抜ける香りなど、食感とは恐ろしく解像度が高いのである。味の照合の結果はいつも明白であった。行き詰まった泉は故郷の大阪にある和菓子屋に菓子作りのいろはを教えてもらえないかと駆け込んだ。大島で取り組んでいるプロジェクトのことを店主に伝えたところ、泉を店内に招き入れ一緒に作って覚えていくよう促したそうだ。小豆を一粒ずつ選定すること、水飴の絶妙な調合などお店の秘密とも言えるノウハウを惜しげもなく泉に授けたのである。このような偶然と好意が重なり六方焼の味は食感ともに飛躍的に向上した。大島に戻り、早速試食会を開く。一口頬張ったときの入所者の方の表情が忘れられない。今まで「パサパサやな」「餡の味がまるで違う」と散々だった評価を突き抜けて記憶の扉が開かれる。無言で咀嚼した後「うまいな」と一言おっしゃった。かくして六方焼は大島で再デビューを果たすことになった。名前を「ろっぽうやき」とし、「おかしのはなし」の焼印が入る。カフェ・シヨルの定番メニューであり、その記憶は誰かに食されると大島の外へとつながる。(図6)

四国では甘夏蜜柑を「だいだい」と呼ぶ。「橙色」と「代々」を掛け合わせた愛称である。大島の中央西側に一本のだいだいの木がある。ある入所者の方が退所して「社会復帰」する際に大島で暮らす野村宏さんが譲り受けたものである。そのだいだいの木はマーマレードを作るために植えられたそうである。カフェスタッフの井木と泉は野村さんとたわわに実っただいだいを収穫、マーマレードを作ることにした。皮はピールにした。だいだいのマーマレードはケーキやクッキーに混ぜ合わせてスイーツにした



図7) 甘夏を収穫する「かんきつ祭」

り、ドリンクで味わっていただく。食するその人は「だいたい」をめぐる物語の一部になるのである。(図7)

4-8. カフェ・シヨルの運営

7月19日に芸術祭が開幕。(10月31日まで) カフェ・シヨルは土・日・月・祝 10:00～16:00にオープンする。ランチは「オープンサンド」(図8)もしくは「キッシュプレート」(図9)を提供し、大島で採れた季節の野菜や果物が楽しめる。(※平日はドリンクのみ) ドリンクはハンドドリップのコーヒー、紅茶、番茶のほか、季節の果物を使ったドリンク(文旦サワーや梅サワーなど)、季節限定のスイーツ(パウンドケーキやスコーン、クッキーなど)を用意する。もちろん記憶のお菓子「ろっぼうやき」も楽しめる。カフェスタッフの井木と泉にこえび隊2名を加え、4名で運営する。

ランチプレートは大島で育てられた野菜や果物を調理したものであり、量に限りがあるので、なくなり次第終了となる。

まとめ カフェ・シヨルで起きたこと

カフェ・シヨルのスタッフ井木宏美と泉麻衣子は2010年6月から2013年12月まで、その半分の期間を大島で過ごした。入所者の方々と畑に入り、水遣りから収穫までを手伝いながら大地の恵みをいただき、心を込めて調理してきた。ある入所者の方は、島で二人の笑い声が響きわたるのがうれしい、とおっしゃった。畑で笑い、道端で笑い、仕込み真っ最中のカフェ・シヨルからも賑やかな声が聞こえてくる。二人の声は本当によく響く。

カフェ・シヨルの玄関口に何台も車椅子が並ぶ。介護員の方々と同伴で入所者の方々が来店されたようである。芸術祭で初めて大島を訪れた方がカフェにご来店、偶然相席になった入所者の方とまったりとお茶を楽しんでいる。よくカフェに顔を出す入所者の方はいかにも馴染みとばかりに「いつもの」とお茶を頼み、ふわっと席につく。カフェ主催のワークショップに参加した方と友達になって約束したのだそうだ。今日この日この席で待ち合わせている。



図8) ランチメニュー 「オープンサンド」



図9) ランチメニュー 「キッシュプレート」

あるお客さんは大島に来るのが2度目。今日はカフェのランチを食べに来たが、混んでいてありつけなかったとのこと。甘夏のパウンドケーキを頬張りながら「リベンジですね。もう一回来ます」。

ある日、筆者はカウンター席でスイーツを楽しむ若い男女に声をかけた。カフェを目当てに大島に来たが、ガイドツアーに参加してどのような島なのか初めて知ったとのこと。だからここのカフェが好き、とおっしゃっていた。入所者の方にこのお客さんのお話をしたら、そういうのがいいんだと、とても喜んでおられた。以前お話をうかがった入所者のFさんは故郷では亡くなったことになっている、だから島の外から人が来ても会わないように部屋にいるの、とおっしゃっていた。でも一般の方がぶらりと来る島になることは大切なこと、とも。カフェに行きたくても行けない入所者の方がある。それを忘れてはいけない。芸術祭が閉幕した後も月に一回カフェを開くことにした。スタッフの井木と泉は手書きのコーヒーチケットを手にして入所者の方々のお部屋に声をかけに行く。二人はこのことによって入所者一人ひとりの顔が思い浮かぶようになったという。月曜日は「出張シヨル」と題して入所者限定の日を設けた。これまでカフェに来られなかった方の姿を見かけるようになった。

カフェが企画し参加を呼びかけた「かんきつ祭」や「よもぎ祭」にいつも参加している親子はまるでレギュラーメンバーのように馴染んでいる。収穫している時も食材に加工している時もそこに笑顔のエプロン姿がある。そして大島に来るたび、娘さんの背がちょっとずつ伸びていく。入所者の方々はなんとはなしにその姿を見ている。

本稿は筆者が取り組んできた医療福祉との協働プロジェクトの歩みを俯瞰し、国立療養所大島青松園での取り組み |つながりの家| へと接続して解説した。療養所には医療の機能があるものの、病院とは背景が異なる施設である。しかしこれまで述べてきたように、病院での取り組みで培った術は療養所での取り組みにも活かされているように思う。おそらくそこにはやさしい美術プロジェクトが設立した当初からの、痛みを携えた一人ひとりへの眼差しが伏流している。

|つながりの家| はガイドツアーとギャラリー、カフェが連動した取り組みであり、殊にカフェ・シヨルはそれらの結節点となっている。人が「集う」こと。そこに命あるものの最も根源的な営みである「食」がある。土に触れ、耕す。恵に感謝しつつ収穫し、美味しくいただく。関わりの緒がそこここに、ある。隣に誰かがいたらきっと話はずむ。話さなくても湧き上がる喜びは自ずと響き合う。そこには隔てる壁も堀も海も、ない。



図10) カフェ・シヨル 玄関および店内の様子

参考文献

文部科学省現代的な教育ニーズ取組支援プログラム 名古屋造形大学 やさしい美術プロジェクト活動報告書 平成19年度～平成21年度

執筆者

高橋 伸行 (美術学部彫刻専攻 教授)